

時を越え祈りと共に

蘇る神々の鼓動

# 高浜七年忌祭

福井県指定無形民俗文化財



福井県高浜町



佐伎治神社

式年大祭



**2025年 6月15日(日) ~ 6月21日(土) 開催**

神幸祭 6月15日 / 巡行祭 16・17日 / 中日祭 18日 / 巡行祭 19・20日 / 還幸祭 21日

【会場】 福井県高浜町 佐伎治神社：福井県大飯郡高浜町宮崎 59-3

【お問い合わせ】 高浜町郷土資料館 0770-72-5270 / 高浜町産業振興課 0770-72-7705

# 高浜七年祭とは

かつて日本では、疫病や災厄は御霊(死者や怨霊)が原因であると考えられていました。それを鎮めるために行われてきた「御霊会」のひとつが、高浜七年祭。十二支の子から巳を陽、午から亥を陰とし、その陰陽の極まった巳と亥の年を「まつり年」として、6年おき(まつり年を含めて7年目ごと)に行われます。神輿巡幸を中心に、曳山芸能、太刀振、神楽、お田植、俄などの各種芸能が、連日連夜7日間に渡り繰り広げられる高麗な祭です。



西山神輿の祭神は大己貴命で、後の大国主命である。『日本書紀』では素戔鳴命と稲田姫命の子とされ、『古事記』などでは両神の六世の孫とされる。『佐佐治神社記録』によると「享和3年(1803)に坂田村の木工勘介と立石村の仁平の手により製作された」ものであるという。西山山元は子生区・畑区・立石区・中寄区が交替で当番区を勤めるが、二回に一度は必ず子生区の清常孫兵衛家が受け持つことになっており、子生区は12年ごと、他の三区は36年に一度のご巡幸となる。



中ノ山神輿の祭神は素戔鳴命で、荒ぶる神の宿る神輿にふさわしく三基の神輿の中で最も大きく、また駕輿丁の数も130名でいちばん多い。昭和34年以降は中ノ山・西山・東山の順に神社を出発している。製作年代は不詳であるが、瓔珞などの鋳造具箱に「明和四亥年(1767)五月吉日」と記されている。中ノ山御旅所は本町区の時岡善大夫家であり、山元は常田家が勤める。屋敷地は高浜城下館ノ口に位置し、本町通りに面している。



東山神輿の祭神は稲田姫命で、女神様らしく京都祇園祭の三基の神輿と同様に、六角の屋根から胴にかけて金色に仕立ててある。『東山神輿帳(写)』によると、現在の神輿は文政4年(1821)4月に大阪心齋橋筋本町、銚屋鎌田常右衛門より購入し、4月7日に龍蔵院(佐佐治神社の別当寺院)に納めている。東山山元は菌部区の松岡弥助家であり、屋敷地は菌部と岩神の境、新川沿いに位置している。

## 神輿と山元 御旅所



若宮区



横町区



赤尾町区



本町区



今在家区



中町区



大西区



佐佐治神社境内に七基揃う

## 曳山芸能

高浜七年祭の曳山では、若連中による「屋台囃子」と、子供たちによる「日本舞踊」や「歌謡舞踊」と「太鼓の演奏」が奉納される。東山に属する横町区・赤尾町区と、中ノ山に属する本町区・今在家区・中町区・大西区・若宮区の七基の曳山が、神輿の動かない2日目・3日目・5日目・6日目に、神社や御旅所本陣に参詣して奉納を行う。特に2日目は「山上がり」と称して全曳山が神社に揃う。その華やかな風景には誰もが目を奪われる。



## 俄(にわか)

江戸時代から大坂、京都、江戸などの大都市を中心に開催された俄狂言が、当地にも伝えられ、各町の大通りに熱狂的に演じられる。民俗芸能の一つ。アドリブをまじえた滑稽な仕種で世相を風刺批判したり、時には土俗的な民衆のエネルギーが沸騰し、卑猥な笑いを誘うことも。



## お田植(事代区)

中ノ山太刀振は「大難刀」(青年だけで振る)のほか「彦山権現」「藤の棚」「橋舟慶」「伊達風俗」「白石仇討」「長吉長五郎」を演じる。演じ手が互いに呼吸を合わせて素早く動き、また静止もするが、流れ自体は停まることなく、緩急自在の演技に観衆は思わず息を呑む。



## 太刀振

東山の太刀振は「大太刀」のほか「橋舟慶」「藤乃棚」「佐倉宗五郎」「白石断」「二随院」「鈴ヶ森」を演じる。型の基本「引き太刀」を十分に練習してから演技の稽古に入るため、下半身の安定感と抜群で、腰の坐うたぎの姿勢の美しさに定評がある。

## 神楽(西部若連中)



七年祭の神楽は西山に属する立石区・畑区・中寄区の青年により奉納され、お囃子が伴う。演目には、「幣の舞」「剣の舞」(本神楽)。「荒獅子」があり、荒獅子には愛嬌たっぷりな天狗も登場するため注目が集まる。

\*記述に関しては、平成十三年度高浜町郷土資料館企画展図録復刻版から抜粋しております。今回の高浜七年祭に際しては記述と異なる事象が生じることもあります。ご了承ください。 2024.12現在 【写真提供：フジハラ写真館】